

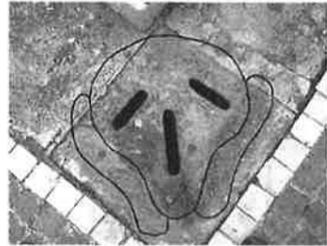
読書

新刊紹介

◆まちかどちよい足しアート

ワックワック著

路上の側溝のふたが名画「ムンクの叫び」の顔になり、街角の消火栓やごみ箱は表情豊かなモンスターに早変わり…。フランス出身のアーティストが手掛けた遊び心あふれるストリートアートのスナップ集だ。



壁のひびや折れた車止めなど、どんな街でも見かけるありふれた題材に少しだけ手を加えることで、見る人が思わず笑顔になる作品に仕上がっている。光るのは、観察力とユーモアのセンス。描き足しに使うインクやシールはすぐに原状に戻せるものを使っているそうだ。(グラフィック社・1080円)

◆言っではいけない

橘玲著

日本社会の構造的なゆがみなどに切り込んできた著者が、医学研究などが示す「残酷すぎる真実」を紹介する。「不愉快な本」と宣言する通り、格差の背景を遺伝などに求める論考は刺激的だ。

貧困、犯罪、結婚、子育てなどがテーマ。例えば別々の家庭で育った一卵性双生児には、人格や能力に共通点が多く見られることから、子育てはほとんど関係ないとまで言い切る。

暮らしやすい世の中づくりのために、不愉快な真実でも知っておくことが必要との指摘は、説得力がある。(新潮新書・842円)

◆イレズミと日本人

山本芳美著

古くから人類が身体を装飾する一つの手段として用いてきた入れ墨。文化人類学的に見れば良くも悪くもない行為が、なぜ日本で不良文化とみなされるようになったかを振り返り、そのレトリックをはがそうとする。

北海道や沖縄などでは民族の習慣として彫られていたほか、江戸時代には職人や火消し、飛脚に好まれた身体装飾だった。しかし明治時代に入ると、外国への印象を気にした政府が取り締まりを始め、戦後は任侠(にんきょう)映画のヒットでアウトローのイメージが強くなっていく。(平凡社新書・886円)

「山びこ学校」のゆくえ 戦後日本の教育思想を見直す 奥平康照著

〈評〉滝口克典・ぶらっとほ一む共同代表 (山形市)

失われた系譜たどる試み

「山びこ学校」とは、山形市出身の青年教師・無着成恭(当時21歳)が、上山の山元中学校で、戦後間もない1949(昭和24)年ごろに担任学級で行った生活綴方(せいかくづかた)の実践記録である。生活綴方とは、いまふう(いまふう)に言うところ、子どもたちにその生活現実を綴らせ、それを題材に議論しながら学びを深めていく問題解決学習のこと。本書は、この「山びこ学校」に関する教育学研究の集大成である。

「山びこ学校」は、生活綴方というツールを用いて、村の子どもたちを、貧しい山村の現実に協同で立ち向かう「主体者」として覚醒させていった点にある。この「主体者」という言葉こそ、戦後民主主義を担い支えていくために不可欠な人びとのありようであった。当時の教育学や教育実践は「山びこ」実践をおおむねそう評価した。しかし、だとするといくつかの謎と疑問が生じる。

学術出版会・4996(税込)



父よ、ロンググッドバイ 盛田隆二著

〈評〉朝山実・ルポライター

「長い別れ」へのまなざし

「父は少しずつ記憶を失くして、ぼくの前からゆっくりと遠ざかっていった。十年にわたる父の介護は、十年にわたる父との別れでもあったのだ」。前書きの一節だが、アルツハイマー型の認知症を米国では「ロンググッドバイ」と呼ぶらしい。本書は25年のキャリアをもつ小説家による初めてのノンフィクション。父の在宅介護や施設入所をめぐる騒動、家族の日々がつづられていく。

書き出しは母からの電話だ。還暦をこしたばかりで難病のパーキンソン病になったと知らされる。看護師として働き続けた母は2002年、71歳で他界。8歳上の父は気も足腰も衰え、「十分前に話したことをさしおぼえ忘れるし、いくら注意しても歯磨きを怠るの」で口臭がひどい」となる。

双葉社・1512(税込)



向田理髪店 奥田英朗著

〈評〉宮村優子・シナリオライター

人生飽きてから面白い

北海道中央部、かつて成鉱の町と、えた「苦沢町」が舞台の連作小説集。閉山の後、町は観光に力を入れるが、ず、ハコモノ行政を進めたあげく財政赤字。以後、人口の流出がとまらない。向田理髪店の店主康彦が物語の主人公。小さな町にも事件は起きる。コトはりは札幌に就職したはずの長男が理髪継ぐと苦沢に戻ったこと。この町をまましてはいけないと、若い者らで奮り合った結果の決断と息子は胸を張るが、康彦はどうも信用できない。



光文社・1622(税込)